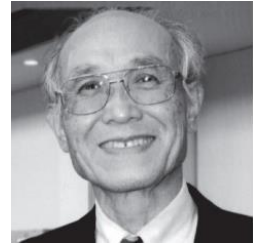


■自由投稿

「言葉の力こそが生きる力」

2021.10.17 記

山本輝夫（12期）



世に政治家は「言葉が命」とも言う。

<2020TOKYO 五輪・パラリンピック>のレガシー（遺産）は「言葉の力」だと感じた。コロナ禍の影響で一年延期の上は無観客での開催となったにもかかわらず、国内はもとより世界各国からも全般に好評で、国民の一人としても安堵。

中でも、パラアスリート達の活躍とインタビューでの“言葉”に感激し、老体の身にも心の変化を生ずる程、偉大なレガシーで最高のプレゼントをいただいた気分です。

格別印象深かったのは、水泳女子史上、最年少メダリスト（背泳 50m、100m）山田美幸さん（14歳、中3）は、両腕が無く、肘にも障害があるが巧みなキックで2個の銀メダルに輝いた。笑顔の絶えない少女の座右の銘は、何と“無欲は怠惰のもと”であると。かつて、「パパはカッパだったんだよ」と言っていたのを思い出し、天国のパパに向かって「頑張りました。私もカッパになったヨ！！」と伝えたいとのコメントには、こちら思わず涙・・・。将来の夢は外交官になる事とも。僕も生きてる限り京都から北陸の空に向かってエールを送り続けるし、神の加護賜わらんことを祈ります。

日頃、「泳ぎ」をジムメニューに組み込んでいる身には美幸さんの泳ぐ姿に驚きと勇気を貰い、今やパワーの源です。

他にも50歳の自転車女子金2個の杉浦圭子さん。高次脳機能障害を抱きながら、日本勢史上“最年長”のメダリストになり、発した言葉は“最年少”記録は二度と作れないけれど、“最年長”記録は“また作れる”。痛快なコメントでファイトを貰った。

パラリンピアン達の躍動は、苦難に粘り強く立ち向かい、多様な個性を認め合う学びの契機になったと同時に、自らを省みる機会にもなった。

パラ大会創始者のグッドマン博士（英）の「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」の言葉を体現し、障害の壁を乗り越える力に魅了された。

以上で締め括ろうとしていたところに、又々、ビッグニュースとレガシーとなる言葉が。

90歳と小生よりも一回り上の真鍋淑郎博士（米国在住、プリンストン大学上席研究員）にノーベル物理学賞（気象学）授賞の報。記者会見で「ビッグサプライズ！」と発し、「好奇心を持ち続けた事が研究の原動力だった」と。

冬場に向かい、コロナ第六波も気になるころだが、明るいニュースに前途の光明を見出し、一日一日を大切に充実して生きたいものです。

前号（2020 会報）佐和田丸氏（10 期）「松江の地名由来」寄稿文を拝読し、目からウロコの興味ある論考で勉強になり、故郷への思いが一層強くなりました。若い頃、和歌山勤務（3 年）の経験もあり、和歌山市に松江地区が在り、何か因縁があるのかな？と思った時に深く探求しなかったことが悔やまれる。

歳を重ねる毎に、松江・島根の活字、ニュースに一喜一憂する度合いも大きくなりましたが、直近の嬉しい“故郷便”は、厚労省発表（9月15日時点）での、「人口10万人当たりの百歳以上者（百寿者）の人数」で、島根県が5年連続トップの「139,75人」と。（因みに、わが街、京都市中京区は人口10.95万人中、百寿者は46人）

いかに故郷の実績が偉大なものかと誇らしく、水と空気が良く、山海の新鮮な食材と大自然がもたらす味の宝庫で、人柄もおおらかでゆったりした性格・・・

♪故郷に帰ろかなあ・・・♪ “だんだん”